



アジア研究センター共同研究
「アジア都市の生活圏」レクチャーシリーズ

Vol.3

インフォーマル居住地での 実践と展開

雨宮知彦

(ラーバンデザインオフィス合同会社 代表)

INTRODUCTION

柏原沙織(神奈川大学建築学部特別助教)

柏原 本日のレクチャーは、ラーバンデザインオフィス合同会社の代表・建築家の雨宮知彦先生にお越しいただきました。雨宮先生は、これまでインドネシアのジャカルタのインフォーマル地区を対象に、実践を積み重ねながら活動されてきました。今年から神奈川大学建築学部デザインコースの非常勤講師をご担当くださっているご縁から、今回の講師をお願いさせていただきました。

本日はオンラインでもたくさんの方に参加いただいていますので、レクチャーの後に質疑応答の時間を設けたいと思います。それでは早速ですが、雨宮先生、よろしくお願いします。

雨宮 ただ今ご紹介にあずかりました、雨宮です。本日はよろしくお願いたします。

私は普段、設計事務所の実務をやっていますが、それと同時並行で、大学との共同研究というかたちで、インドネシアのジャカルタやアルゼンチンのインフォーマル居住地のプロジェクトに携わってきました。「アジア都市の生活圏」というテーマから外れるようなところもあるかと思いますが、これまでの実践についてお話ししたいと思います。

はじめに自己紹介をします。私は東京大学工学部建築学科を卒業した後、大学院は新領域創成科学研究科の大野秀敏先生の研究室を修了しました。その後、4年ほど設計事務所のシーラカンスアンドアソシエイツに勤めた後に独立し、最初は2人で設計事務所を始めたのですが、2017年からは私個人が代表を務める設計事務所を運営しています。

設計活動と並行して、独立してすぐ、2009年から首都大学東京の特任助教を務めていました。首都大学には、「リファイニング建築」という再生建築の第一人者である青木茂先生がおり、その研究室の特任助教として、団地再生のプロジェクトなどに4年ほど携わりました。

それと並行して、総合地球環境学研究所(地球研)で、村松伸先生がプロジェクトリーダーを務めておられたメガ都市プロジェクトという、およそ70名もの研究者が参加した大規模な研究プロジェクトの末端にプロジェクトメンバーとして入れていただきました。最初は2011年、現在東京大学教授をされている岡部明子先生のチームから、建築設計の実務をしている人にチューターとして入ってもらえないかという公募がかかって、そこに応募して選んでいただいたのが始まりです。そのときに初めてジャカルタに行って以来、ジャカルタとのご縁というか、プロジェクトが続いていったという流れです。メガ都市プロジェクト自体は、最終的に『シリーズ:メガシティ』として、全

6巻にまとめられ、東京大学出版会から出版されていますので、ご興味のある方はぜひご覧いただきたいと思います。

地球研のメガ都市プロジェクトは2014年まででしたが、その後地球研のプロジェクトが終わった後も、千葉大学、東京大学では特任研究員の立場として、岡部先生の研究室と一緒にジャカルタの実践プロジェクトなどを進めてきました。

本日はその過程で2つ、インドネシアのジャカルタで2011年からやっていたプロジェクトと、その後2017年からアルゼンチンでやっていたプロジェクトについて紹介します。2つともインフォーマル居住地と言われるところでのプロジェクトで、皆さんはあまりなじみがないかもしれませんが、このインフォーマル居住地での実践を通して、都市や建築をどう構想し、つくるかということに取り組んでまいりました。2つともコロナ禍の時期に現地に行けなくなり、2020年頃に一度ストップしてしまいましたが、ようやく去年(2024年)、ジャカルタでは久々にワークショップを実施できました。アルゼンチンのほうは、コロナ禍以降、行けていないため、少し古い情報になるのですが、ご紹介できればと思います。

LECTURER



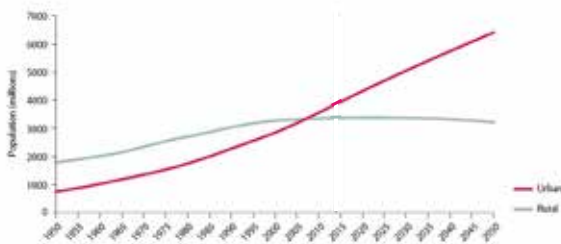
雨宮知彦
(ラーバンデザインオフィス合同会社 代表)

1980年東京生まれ。建築家。東京大学大学院修了後、シーラカンスアンドアソシエイツ(CAt)勤務を経て独立し、現在ラーバンデザインオフィス一級建築士事務所代表。設計実務の他、大学との共同による実践研究や、地域活動にも積極的に取り組む。SDレビュー(2013年/2021年)、日本建築学会作品選集新人賞、日本建築学会教育賞、グッドデザイン賞(2020年)、FRAME AWARDS 2021 Small Office of the Yearなど受賞。著書に『メガンティ6:高密度化するメガシティ』(共著)。

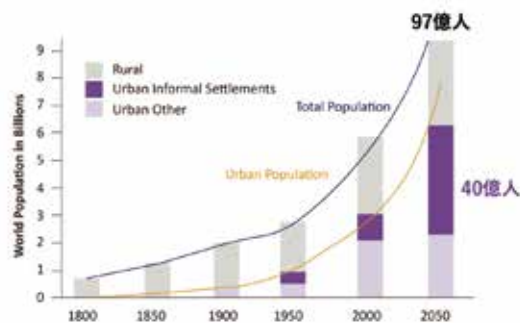
LECTURE

都市人口の増加問題

前提として、なぜこういうプロジェクトに取り組んでいるかという、まず都市と農村の人口問題があり、2007年頃から都市人口が田舎の人口を超えて増加しているという状況があります。現在の2025年、そして将来的に、ますます都市人口のほうが増えると予想されています[図1]。何でこんなことが起きているのか、その中身を見てみましょう。このグラフ[図2]の薄いグレーのところは田舎の人口で、これはそれほど変わらないのですが、都市人口を示す濃い紫と薄い紫のところの増加傾向が分かります。さらにその中の濃い紫のところは都市におけるインフォーマル居住地の人口を示しているのですが、ここの増分が都市人口の増加を担っているというわけです。つまり、このインフォーマル居住地を都市問題として考えることが、今、既に重要なのですが、今後ますます重要になってくるだろうという問題意識が、前提としてあるわけです。これは地球研のころから、われわれがインフォーマル居住地を多く抱えるアジアのメガシティに取り組んでいるところの問題意識の根幹です。



【図1】 United Nations, World Urbanization Prospects 2014 revision



【図2】 Source: UN-DESA, 2019; UN Habitat, 2017

インフォーマル居住地とスラムの定義

今、インフォーマル居住地という話が出て、それは何だと思えるものいるかもしれませんが、国連人間居住計画「UN-Habitat」の定義を引用すると、インフォーマル居住地というのは、「住者が法的権利を持たない、あるいは不法に占有されている土地に住居群が建てられ

た地域」、あるいは「住宅が現行法および建築法規に準拠していない」と書かれています。つまり、国家行政をフォーマルな主体として設定した上で、その管理の「外側」にあるという定義になっているということ、最初に共有しておきたいと思います。

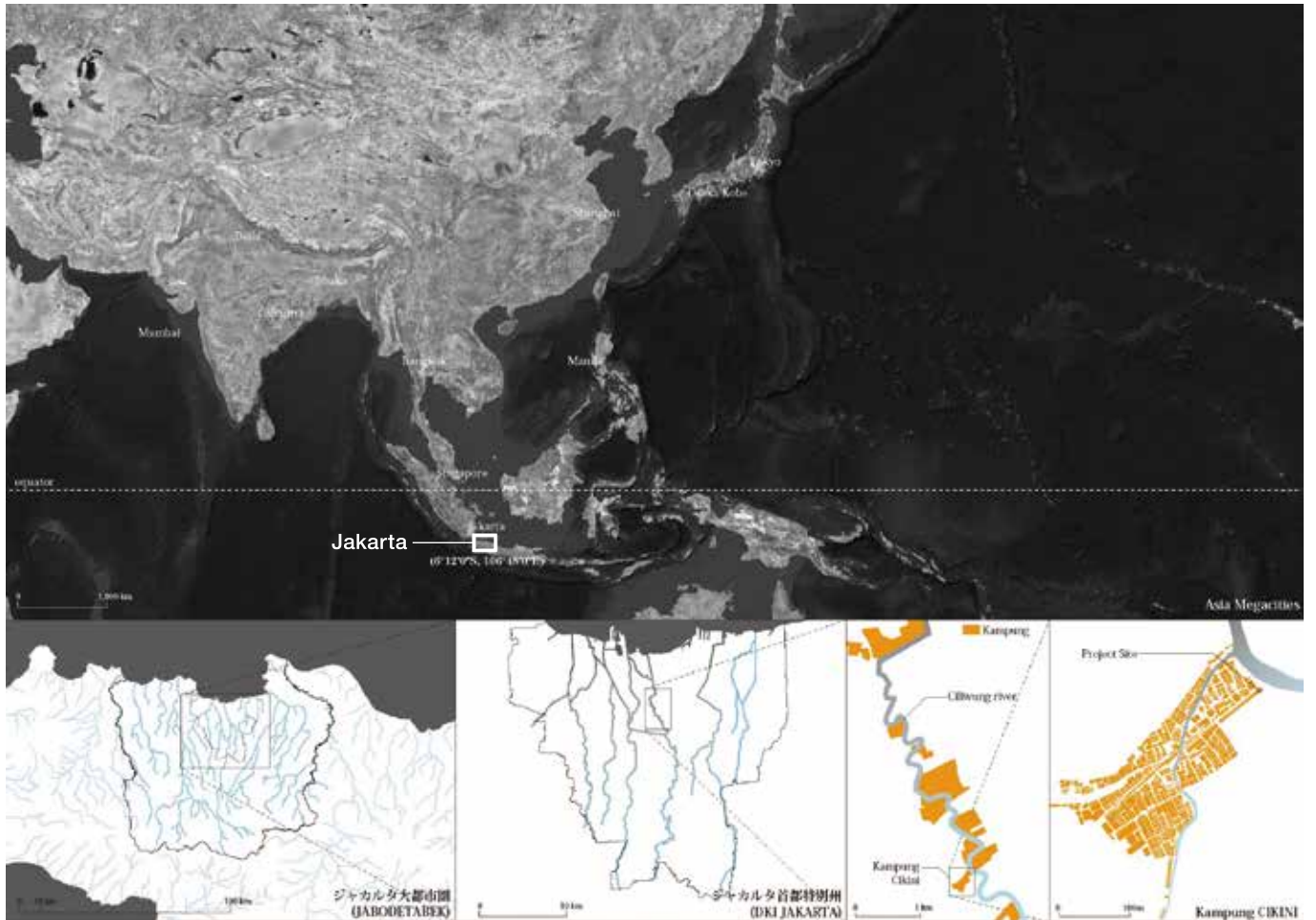
一般的にインフォーマル居住地というと、スラムのことでしょうかというような、若干、短絡的な勘違いがあるのですが、スラムの定義のうち、インフォーマル居住地に該当するのは住み続けられる保障がない、Tenure Securityと呼ばれている部分です。その部分は、インフォーマル居住地とかなり密接に関係しているのですが、それ以外のスラムの定義は、水やトイレなどの衛生施設へのアクセス、住居の耐久性が欠けているなど、どちらかという物理的に劣悪な状況のことを指しています。つまり、スラムのようにめちゃくちゃ密集してなくても、それなりに低密度なエリアがインフォーマル居住地である場合もあるわけです。後で紹介するアルゼンチンの住宅地は、あまり密集しているわけではないですが、インフォーマル居住地の問題が山積しています。

ジャカルタの地理、地形の特徴

まず、ジャカルタのプロジェクトから説明していきます。これが15年ほどフィールドにしているジャカルタのチキニという場所の鳥瞰写真です[図3]。ジャカルタというのは、皆さんご存じのとおり、赤道より南側、ほぼ赤道直下の四角で囲っているところです[図4]。拡大すると、人口も面積も、だいたい東京と同じような規模感です。北側に太平洋があって、そこに川がたくさん流れ込んでいる都市です。地形は、高低差がほとんどなく、ほぼフラットなので、水が蛇行しながら海に流れ込むというまちの特徴があります。その豊かな水系を頼りに、人が集積しています。よく言われることですが、ジャカルタは公的な下水道の敷設率が12%しかありません。ほとんどの居住地が直接、川に排水をそのまま流しています。その中で一番大きいチリウ川という川があるのですが、住民の皆さんが川に直接排水を流していて、世界一大きな下水と言われているぐらい、汚染された状況です。



【図3】



[上:図4] [下:図5]

カンポンチキニの近年の状況とクリアランスのリスク

私たちがフィールドにしているエリアも、このチリウン川沿いにあります[図5]。右から2番目の図を拡大すると、Ciliwung riverと書いてありますが、その周りに高密度に人が住むカンポン(Kampung)がへばりついています。インドネシアでは高密度に人が住んでいる居住地を、インドネシア語で「村」を意味する「カンポン」と呼びます。一番右の図が、私たちのフィールドである「カンポンチキニ」という地区を拡大したものです。

ジャカルタで言うと、先ほど鳥瞰写真で見せたような、都市カンポンと言われるところに、ジャカルタ市の7割から8割の人が住んでいる状況です。ですので、この航空写真[図6]のようなところを、全部、計画された居住地に変えていくことは、かなり至難のルートであり、この現状を踏まえてどう生活を改善していくかということが、大きな課題の一つになっています。

先ほどの航空写真で、黄色で囲われたところがカンポンチキニと呼ばれているところで、約4ヘクタールのエリアに人口およそ5,000人が住んでいます。人口密度は1ヘクタールあたり1,250人と、都市研究をしている人でしたら、ものすごい人口密度だと思われるでしょうけれども、これでもあくまでも平均してこの人数ですので、実際、

家の中をのぞくと、もう本当に狭いところに10人とか、15人とか、寄り合って住んでいるという状況です。

都市カンポンは中心市街地から近いことが多く、再開発リスクを抱えています。この航空写真[図7]の左が最初に私が訪れた2011年、右が2017年ですが、緑地だったところに五つ星ホテルが建てられて、クリアランス※1されています。上空から見ると、高い壁1枚で隔てられた向こう側にカンポン、こちら側には流線型のリゾートプールが並置されています[図8]。このように、商業的な開発と都市カンポンがモザイク状に並置される状況はジャカルタの一つの特徴と言えるかもしれません。

先ほど紹介したチリウン川も、政府によるトップダウンで、大なたを振るうように護岸整備が進められていて、そのときに、川の沿岸の家は、人がまだ住んでいるにもかかわらずバスッと強制的に除却され、家の断面があらわになっています[図9]。このようにクリアランスされるリスクは、決して将来の話ではなく、すぐ隣にある現実なのです。

※1 一掃するという意味から、都市計画において、古い建物をすべて取り壊し、新しい建物を建設する類型の再開発。



【図6】



【図7】



【図8】



【図9】

カンボンチキニのまちなかの様子

一方で、カンボンチキニのまちの中に目を向けますと、パサールチキニというメイン通りがあるのですが【図10】、ここは元々鉄道が通っていた廃線跡地がスクオットされて商店街になったところで、非常に活気があります。当時からある木造の屋根も、なかなか趣があります。特に早朝は、市場として大変にぎわっています。

昔は鉄道でチリウン川を渡って向こうの対岸に行くと、アヘンを製造していた工場があったので、アヘンを運搬していた鉄道ということで、アヘン通りといった名前と呼ばれている通りもあります。アヘン通りは、パサールチキニの1本右側にあります。

カンボンには、町内会、町会、隣組のような意味で、インドネシアの言葉でエルター（RT）と呼ばれる町会がたくさんあって、町会ごとにMCKと呼ばれる共同水場があります【図11】。これはトイレと洗い場と水浴び場の3点セットで「MCK」なのですが、まち全体が大きなシェアハウスみたいなもので、各住戸がそれぞれトイレやお風呂を持っていないので、地区の中にこういう共同の水場を持って、そこが一つのコミュニティの交流の場所にもなっています。

道は非常に狭く、建物も劣悪ですが、感覚としては、みんなすごく幸せそうと言うと、言い方が合っているかどうか分からないですが、

切実な生活を、自分たちでちゃんとつくっているという印象です【図12】。誰かがつくった生活の枠組みの中で生きているのではなく、自分たちの必要なものをつくって、売って、買って、動いて、という生活があるように感じます。これに対してすごく魅力を感じて、以来、この場所に付き合っています。



【図10】



【図11】



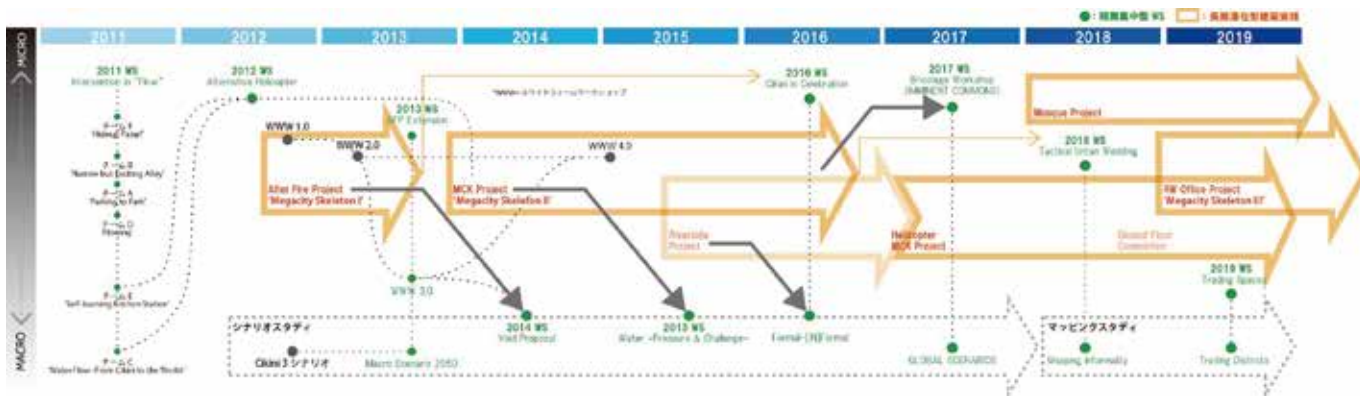
【図12】

短期集中型ワークショップと長期滞在型実践

2011年に、インドネシア大学と日本の千葉大学、東京大学、東京理科大学のジョイントのサマーワークショップを最初に行ったのですが、このワークショップを年に1回続けていった結果、最終的にはそれが定番になっていきました。

2011年に最初の短期集中型のワークショップを、約2週間、現地に滞在して行いました【図13】。今、九州大学准教授をされている岩元真明先生と私の2人でこのワークショップのチューターをやったところからスタートしました。これがそのときの写真です【図14】。15年ほど前なので、このときは私もまだ30歳ぐらいでした。次の2012年は、地区の中を流れる汚いどぶ川の上に、子どもの遊び場となるブランコをつくるワークショップをやりました【図15】。2016年には、「Cikini in Celebration」というテーマで、当時、千葉大学の大学院生で、その後、紹介するここでの建築活動にも参加した上田一樹さんの結婚式を挙げるというワークショップをやりました【図16】。このように、様々なテーマのワークショップを毎年行ってきました。

この図【図17】の緑色の丸で示しているところが、毎年のワークショップで、2011年からコロナ禍になる前まで継続して、2020年はオンラインで行いました。この表の上に、タイトルとして『短期集中型ワークショップ』と『長期滞在型実践』を組み合わせた建築デザイン実践」と書いてありますが、この内容で、日本建築学会教育賞を岡部先生、インドネシア大学のエリサ先生と一緒に頂いています。オレ



【図17】

オレンジ色の矢印で書いてある部分が「長期滞在型実践」で、簡単に言うと、現地に長めに滞在して、実際の建築をつくるという活動です。緑色の丸の短期集中型ワークショップで、地域の課題やニーズを掘り起こして、そこで頂いたリクエストなどを元に、このオレンジ色の矢印のプロジェクトがスタートして、それがまた次のワークショップの課題につながっていくという流れを、結果的につくっていったような感じです。



【図13】



【図14】



【図15】



【図16】

After Fire Projectのコンセプトと構成

これが最初の建築プロジェクト「After Fire Project」で、火事の跡地が地域内にあり、そこを敷地としたプロジェクトです【図18】。地区のルールで、火事を起こした家の人は、その町会の半数以上の合意がないと戻ってこられないという割と厳しめのルールがあり、ここはもう戻ってこられなくて、結果的に空き地になっている場所でした。この町会の人から、火事の跡地でしばらく使っていない土地があると聞いて、空けておくのもなんだから、何かコミュニティの集会所をつくってみたいか、という話になりました。ただ、特異点としての集会所をつくるよりも、せつかくなので、こういう高密度居住地での住宅モデルになるような建築のコンセプトをつくと面白いのかなと思って取り組みました。

改めてカンポン内の住宅の環境を見ると、非常に建て詰まっています。1ミリでも自分たちの住む場所を増やそうと、奥へ奥へと延伸して、横にも縦にも伸ばしていくので、どんどん隙間がなくなって、奥のほうは真っ暗になっています【図19】。一方で、路地に出ると、屋根と屋根がもうぶつかるぐらいに隙間は細いのですが、赤道直下なので、少し隙間があるだけでも、結構明るいことがわかります。

日本でも似たような感じですが、ジャカルタ政府が提案する、こうした密集地の住居改善策として一般的なのは、路地から住居をセットバックして幅員を広くして、環境改善するという方策です。それに対して、われわれは、真ん中の路地のところは、幅が細くても雰囲気が良いし、そこにある種のコミュニティがあるので、その雰囲気を生かしながら、同じセットバックをするのであれば、背面をセットバックして、後ろから光を入れて通風を取って環境を改善するという提案をすることになりました【図20】。

つくった建築は、いわゆるスケルトン・インフィル※2のような、躯体と仕上げを明快に分けた構成としています【図21】。まず、この青色の部分の躯体を先につくります。地域に対して、部外者、第三者として関与するにあたり、私たちはこのベースとなる躯体を責任をもって設計することにしました。ここは角地だったので、背面はL字になっているのですが、図の黄色い部分を環境ポイド (Environmental Void) として、道の反対側に隙間を持たせ、躯体の段階で一定の光環境、風環境を担保するという設計です。そこに対して、道路側はFlexible Skinといって、図の赤い部分ですが、いわゆる路地のファサードというか、路地空間のインテリアのようなものですから、そこは地域の自由な工法でつくっていく。いわゆるコアハウスのような順序でつくりました。

断面図を見ると、背面に500~600mm程度の隙間があります【図22】。日本だと、このぐらいの隙間ではあまり効かないのですが、ジャカルタは真上から光が入るので、このぐらいの隙間でも結構効くのですね。ただ、現地の居住者からすると、1ミリでも床を増やしたい状況なので、こういう吹き抜けのようなものはだいたい却下されるというか、「いや、そこは床にしようよ」という話になるので、それであれば、効果を共有しながら、実験的にやっというということで、子どもたち

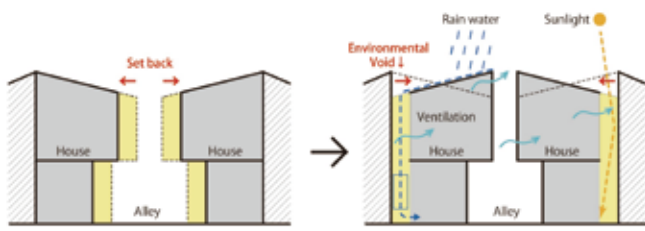
と敷地の壁を白く塗って、実験小屋をつくりました[図23]。この小屋は、屋根がスライドようになっていて、奥の隙間をどのぐらい開けると光の効果があるのかが分かるようになっています。地域の人と実際に実演して、少しの隙間でもかなり効果があるということを確認してもらい、これならやってもいいかと賛同してもらえるようにプロジェクトを進めました[図24]。ちなみにこの1分の1の小屋の材料は、後々、建築のコンクリートの型枠に転用されました。

※2 建築物を支える柱・梁などの構造躯体(スケルトン)と、内装や設備(インフィル)を分離して設計・施工を行う建築工法。



[図18]

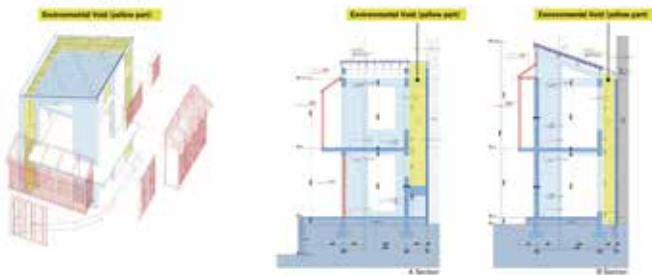
[図19]



政府による道路拡幅案

メガシティの小さな躯体

[図20]



[図21]

[図22]



[図23]



[図24]

After Fire Projectの建設過程

まず、このような感じで、躯体が立ち上がります[図25]。左の光が差し込んでいるところが、1階の隙間の部分です[図26]。2階はこのように感じます[図27]。右側に結構、派手な色使いの建物も見えていますが、さすがにあの色にするのはやめてね、などと言いながら、Flexible Skinの部分は割と自由につくってもらいました[図28]。なので、出来上がった建物の外観は、僕たちの感覚からすると、あまりかっこよくないのですが、この路地にはなじんでいます[図29]。彼らからすると、せっかくおまえたちが設計したのだから、こちらもだいたいかっこよく仕上げたよ、という感じなのですが。

奥の壁は、白くすることによって、隙間の効果を高めたいと思ったので、みんなで白く塗りました[図30]。中の内装の黒い壁は、日本ペイントさんに黒板塗料を提供していただいて、子どもたちがここで勉強するということを計画しました[図31]。これは奥の壁側から撮影した写真です。この建物はモデル建築として非常に小さい建築なので、もちろん路地側からも十分光が入ります。実際に中に入ってみると、本当に4面全部外みみたいな感じの明るい空間になっています[図32]。

今ご説明したプロジェクトの敷地は、図の左上の赤い破線部分です[図33]。この敷地の右隣と、その隣の土地も空いていたので、続きでやっていこうと計画しました。できればこの図のように、ここで提案したボイドのコンセプトが連続していくようなことができればいいと考えました[図34]。これを全部つくるのは無理ですが、地域の人に、これは面白いと思ってもらい、波及していくことを期待しています。



[図25]



[図26]



[図27]



[図28]



[図29]



[図30]



[図31]



[図32]



【図33】

【図34】

メガシティの小さな躯体2

モデルとしては2つ目の「メガシティの小さな躯体2」です[図35]。これも先ほどと同じように、ポイドを持つ住宅です。こちらも、すごく紆余曲折あったプロジェクトですが、今日は詳しい説明はスキップします。これは、先ほどご説明したMCKという共同水場とトイレが1階にあって、2階に居住スペースがある複合建築です。

これらの建築は、当時、岡部先生がいらした千葉大学の大学院生がこのカンボンに住み込んで現場を担当していました。先ほど、冒頭で柏原先生が「ジャカルタに長期滞在して」と言われましたが、実は私自身は年に数回見に行く程度で、学生が半年から1年ほど長期滞在しながら、現場で実際につくる活動をしました。今は安全管理とか、そういうことがどのくらい厳しくなっているのかわからないですが、当時だからできたのかもしれない。2016年のワークショップで結婚式をしていた彼らも、今はもう立派な社会人ですが、彼らにとっては非常に得難い経験となったようです。



【図35】

インフォーマル/インフォーマリティとは

ここでいったん、これまで言葉として出てきた「インフォーマル」や「インフォーマリティ」についてお話しします。最近、市川紘司さんと連勇太郎さんが編集された『建築をあたらしくする言葉』という本が出版されて、この「インフォーマリティ」の章を、私が担当させていただきました[図36]。そこでジャカルタの話なども入れ込みながら書いた内容を挟みながら、説明させていただきます。

【図36】



建築をあたらしくする言葉
(2024)

インフォーマル/インフォーマリティという言葉は、日本ではそうでもないですが、海外の都市や建築の分野ではホットというか、注目されていて、欧米の大学では結構、取り上げられています。少し前ですが、2012年にはチューリッヒ工科大学で、インフォーマルをテーマとしたリサーチや設計スタジオがありました[図37]。日本でも、横浜国立大学Y-GSAの研究ユニットによる『Creative Neighborhoods』で、インフォーマリティが取り上げられていたり、私も参加していた日本建築学会の『都市インフォーマリティから導く実践計画理論』では、世界のインフォーマル地区を対象として、若手の研究者で2年ほど研究していたりもしました[図38]。

このインフォーマル/インフォーマリティという言葉は、日常的には「ラフな」「カジュアルな」といった意味で、例えば「インフォーマルな格好でいいよ」というように使われることが多いですが、オックスフォード英語辞典によれば、第一義的には「形式を欠くこと」、「認可・規定された形式に従わないこと」、「確立された手続きやルールを遵守しないこと」と定義されており、「フォーマル」に「イン」という否定の接頭語が付いていることからもお分かりの通り、「フォーマルでないこと」と定義されています。

つまり、インフォーマルというのは、元からあるものではなく、人間の関与する世界というものがあるとして、私は基本的に全てがインフォーマルだと思っているのですが、誰かがフォーマルの範囲を決めること、そこにあるフォーマルな枠組みを領域化することによって、初めて、その外側がインフォーマルですよ、と定義されてしまった存在であるというふう考えられます[図39]。

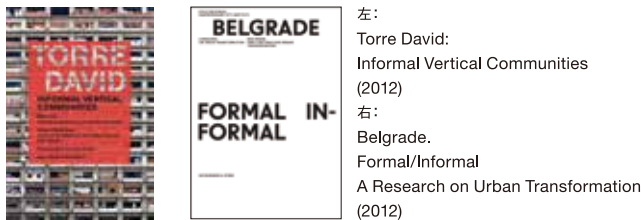
一般的に、さまざまな領域や文脈において、社会を合理的に管理、統治するために、ある主体によってフォーマルな領域が定められて定式化されていくということがあると思います。このフォーマルな主体というのは、国家や行政が一般的ですが、家族のフォーマルなルールなどもありますので、この主体はいろいろなスケールで多元的に現れてきます。こうした検討を延長していくと、究極的には、このフォーマルというのは第三者による論理で、一方でインフォーマルというのは、当事者間の論理であると言えます。この視点からは、他にも、主観的—客観的、アマチュアリズム—専門性、交渉—制度などの関連用語が整理できるのかなと思います[図40]。

例えば、私が「柏原先生、その水を飲んでいいですか。」と、柏原先生のペットボトルの水を飲もうとしたら、断られたとします。なぜ、今、断られたかという、柏原先生と私の関係において、ペットボトルを共有して飲みたくないという気持ちが働いたからです。もし、仲の良い人だったら、飲ませてくれたかもしれない。これは全て、当事者間の論理で、ある行動のジャッジがされるわけです。一方で、そもそもこの空間が飲食禁止だったら飲んではいけなかったか、あるいは、その水の賞味期限が切れていたら飲んではいけなかったか、「水を飲

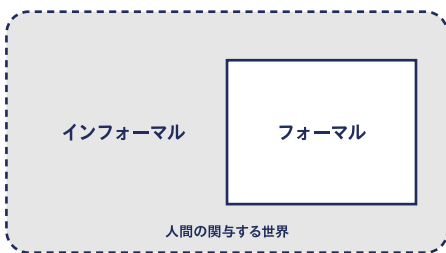
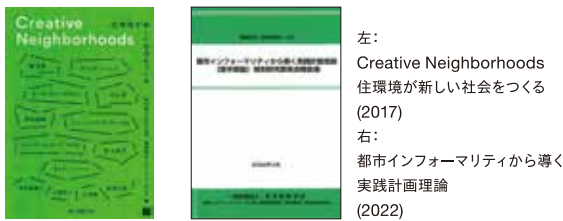
む」という行為について、飲んででもいいのか、飲んでは駄目なのか、フォーマルな論理によって決まることもあれば、インフォーマルな論理によって決まることもあります。ある行動に対して、内的な判断と外的なルール、インフォーマルな判断とフォーマルなルールがあるというふうに言えるのかなと思います。

建築の設計においても、インフォーマルとフォーマルが存在すると言えます。窓をどこに開けるのかは、施主と設計者の間で自由に決められますが、一方で、建築基準法のようにフォーマルなルールで定められた採光規定によっても、大きさは決められます。何かをつくる際、一つの物事を決めることにおいても、いろいろなフォーマルとインフォーマルのせめぎ合いの状況があるというふうに見ることができると思います。

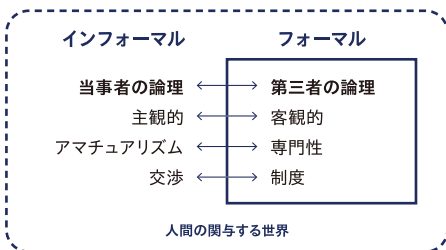
[図37]



[図38]



[図39]



[図40]

フォーマル/インフォーマルの仕組み

さらに、フォーマル/インフォーマルがどういう仕組みになっているのかと考えると、トップダウン型とボトムアップ型があると私は考えています。はじめにトップダウン型の話をして、後でボトムアップ型

について、参考にお話ししたいと思います。

トップダウン型というのは、先ほど説明してきたように、フォーマルを規定することによって、インフォーマルが生まれてしまうという見方です。A. Royさんが、「インフォーマリティは『計画』の前には存在しない」と言われていますが、ある何か計画されたものによって、結果的に生まれてしまうと定義されるインフォーマルという考え方です。

例えば、インフォーマルという言葉でよく使われるのが、発展途上国の仕事の枠組みの中で、インフォーマルセクター※3が挙げられると思います。基本的にインフォーマルセクターという問題が扱われるときには、どうやってインフォーマルセクターを底上げしていくか、フォーマライズしていくか、という議論が一般的です。例えばジャカルタに行くと、こういうバイクタクシーがあります[図41]。アジアだと、いろいろなところで見られると思います。元々、この人たちはインフォーマルセクターですが、個人でそれぞれのバイクに人を乗せて、小銭を稼いでいます。なぜこれがインフォーマルセクターかという、この人たちの稼いだお金から、税金が国に納税されていないので、そういうことによってインフォーマル部門と見なされるわけです。最近では、バイクタクシーが全部UberやGojekといったフォーマル部門に吸い上げられて、どんどんフォーマライズされていくわけです。それは基本的に、皆さん何か良いことだと思っているのですが、本当にそうなのかなとも思っています。

あるいは、先ほど紹介したインフォーマル地区は、フォーマルな土地所有権やインフラのない場所として定義されるという話をしましたが、これについても、基本的にはフォーマライズすることが目指されています。ちゃんと土地所有権を明確化して、フォーマルな居住地とすることが目指されているのですが、フォーマライズすることが、必ずしも安定的な居住の保障につながっていないのではないかと議論もあります。全てフォーマライズすることが、必ずしも良いとは限らないのではないかと問題意識の中で、インフォーマルをどう延命させるか、という語弊があるかもしれませんが、どちらかというと、インフォーマルなものは元々インフォーマルであった中に、後からフォーマルが出てきたわけなので、インフォーマルの自由さのようなものをどう担保していくかということも、大事ではないかと思っています。

※3 政府の管理下になく、法的な手続きや規制の対象外にある経済活動のこと。発展途上国で多く見られ、露店商、行商人、日雇い労働者など、さまざまな職種が含まれる。



[図41]

インフォーマルな領域を保持する設計事例

このトップダウン型のフォーマル／インフォーマルの枠組みの中で、どういう設計や計画をしていくかというときに、私たちがコアハウスなどで試みたことは、インフォーマルな領域を保持する実践と言えるのかなと思います。私たちのような建築家や都市計画家、つまりプランニングを行う専門家は、基本的にフォーマル側で、第三者としての立ち位置から逃れることは難しいです。その中で、どういう振る舞いができるのかを考えたときに、トップダウン型のフォーマル／インフォーマルの関係性そのものをデザイン対象とし、インフォーマルな実践を支えるためのフォーマルを構想するという戦略が考えられると思っています。

それを3つに分けたのですが、1つ目は「インフォーマルな実践を可能にする最低限のフォーマルのみ用意する」。これは、例えばELEMENTALが設計した「キンタ・モンロイの集合住宅」のようなコアハウスがあります[図42]。ベースになるフォーマルな居住空間を用意して、残りはインフォーマルの豊かなスキルに引き渡す。先ほど、私が見せた「メガシティの小さな躯体」も同じような考え方です。介入はできるだけ最小限にして、その土地の人々の持っている生きる力や、コミュニティをスポイルしないようにするという考え方です。ただ、建物の躯体をつくるときに、最低限の通風や採光を担保しようというのが、先ほどお見せした「メガシティの小さな躯体」のコンセプトでした。

もちろん、インフォーマル地区の建築に限らず、例えば、スキーマ建築計画の長坂常さんが設計した「武蔵野美術大学16号館」のように、竣工後に美術大学の学生が自由に改変することができる余白を残した建築の実践も、こういう部類に入ってきます。自律的なインフォーマルが担保されるよう、未完成な余白のあるフォーマルがいかにかに計画できるかという考え方になります。

2つ目が、「フォーマルな計画からインフォーマルな利用までを連続的につなげる方法」です。例えば、乾久美子さんと市川竜吾さんが設計した「ハウスM」では、計画や設計のソースをユーザーが共有しやすいものとしてカタログ化するというか、設計者とユーザーが連携を強くして、フォーマルな計画からインフォーマルな利用までを連続的につなげようとする、パターン・ランゲージのようなやり方です。居住者が生活を送りながら、自由に手を加えていきやすくするような設計手法によって、インフォーマルの豊かさを担保していくことが目指されています。

3つ目が、「インフォーマルの実践を支える『システム』を提案する方法」です。例えば、連勇太郎さんがやっている「モクチンレシビ」は、木造賃貸アパートを改修するための部分的なアイデアをカタログ化したもので、ユーザーが取捨選択して組み合わせることができます。あるシステムの中にユーザーを従属させてしまうものの、それでも、

ただ与えられた住まいに住むだけでなく、そこに住まい手の自発的、自律的な選択や改変を担保しています。このように、商業的にインフォーマルなことを組み合わせようとする方向性もあります。どちらかという、私は行政とどのように企画を連携させるかということを考えてしまうのですが、連さんはどうやってビジネスとして成立させていくかということを実践されているのかなと思います。

いろいろな方法があり、それぞれに課題はありますが、今の日本のように、空間があまねくフォーマル化していってしまう動きにあらがい、どのようにインフォーマルな領域を保持していくかという取り組みには、今後ますます期待できるのではないかと考えています。



[図42]

アルゼンチンプロジェクト「Mi Barrio es Mi Casa」

次に、アルゼンチンのプロジェクトについてご説明します。アルゼンチンのSan Martin de Los Andesというところが敷地で、これも岡部明子先生と一緒に共同させていただいたプロジェクトになります。

地図を見ると、北と南、東と西に分かれ、本当に地球の真裏という感じで[図43]。東京から行くと、40時間ぐらいかかります。太平洋側にチリがあり、チリとアルゼンチンの境界の山あいにある湖のほとりに、敷地があります。アルゼンチンの中で唯一、水系が太平洋側に流れている場所なので、実は日本とつながっているとも言える、不思議な縁を感じる場所です[図44]。

先ほどのジャカルタのプロジェクトは、大学の研究室が主体となって自発的に行っていたので、どうスケールするかという展開に向けて、インドネシア政府やJICAに話に行き議論しても、やはり土地がインフォーマルであることを理由に、フォーマル側は手を出せないというふうに言われてしまうという難しさがありました。インフォーマルな場所のほうが課題が多いのに、なぜそこに手を出せないのかというジレンマを感じながら、このアルゼンチンプロジェクトに着手したという経緯があります。

アルゼンチンプロジェクトは、発注側がSan Martin de Los Andes地区の住宅局、いわゆるフォーマルな行政側だったので、そういう関係性も使いながら、ジャカルタとは違うコンセプトを考えていきました。



【図43】



【図44】

San Martín de los Andes地区の特徴とインフォーマル地区

まちの俯瞰図を見ると、湖のほとりに、非常に計画的につくられたグリッド状の、いわゆるリゾート地のような場所です。冬はスキー客、夏はトレッキングをしに、たくさんの観光客でにぎわいます。まち並みはこのように感じで【図45】、パタゴニアなどのアウトドアショップ、1泊3万円くらいするホテルやレストランが建ち並んでいて、日本でいうところの軽井沢のようなまちを想像していただくと分かりやすいと思います。

こういう近代的なリゾートタウンの中に1カ所だけ、不規則に住宅が建ち並ぶエリアがあります。この、まちを取り囲む山肌の斜面地の一画に展開するインフォーマル居住地区「バリオカンテラ」が、対象地です【図46】。ここは、1970年代に就業機会を求めてチリから流入した移民が居を構えて、それ以降、土地所有がインフォーマルな状況のまま、まちの発展とともに徐々に高密度化していった場所です。南米ではよく見られるのですが、斜面地にインフォーマルな居住地区がへばりつくように広がっています。平地のところは、都市計画としてしっかり整備されていて、そこからあふれた人が斜面地に住みついていくというパターンは、南米では結構、多いように思います。このように、急斜面に住宅がへばりついています【図47】。先ほどのジャカルタの事例に比べると、一つ一つの住宅はそれなりの規模があって、ぱっと見た感じは豊かそうですが、土地はインフォーマルな居住地区のため、インフラの整備がここまで回っていないという現状があります。斜面地のリスクと背中合わせで人々が暮らしていて、擁壁も自分

たちでタイヤでつくっているような状況です【図48】。上から見ると、道路もけもの道のように何となくできてきたような感じです【図49】



【図45】



【図46】



【図47】



【図48】



【図49】

インフォーマル地区の改善アプローチにおける課題

この居住地を対象として、私たちは2017年以降、現地の行政と連携して、環境改善に向けた全体計画案を作成し、2020年末に取りまとめました【図50】。今日はその一部を紹介します。

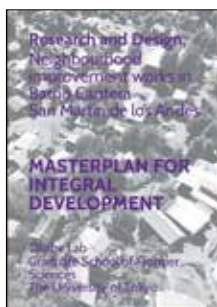
こうしたインフォーマル地区には、多重の居住リスクがあり、それらを解消すべく、これまで世界的にいろいろなアプローチが取られてきた歴史があります。1960年代以降、インフォーマル居住地区対策の主流は、再定住先を公的に整備して、いわゆる立ち退きを求め、クリアランスを進めるというものでした。これには、再定住先に公的な住宅を供給するものから、再定住先での住民のセルフヘルプをある程度サポートするものなど、いろいろな種類があるのですが、既存のインフォーマル地区の量的な規模が大きく、先ほども、ものすごい量があるとお話ししましたが、そもそも、その量に対応しきれなかったという問題がありました。他にも、コミュニティやなりわいの持続性が途切れてしまう、あるいは、新しくつくった居住地で標準化された、非人間的な居住空間の問題などが指摘されてきました。

それに対して、生活の継続を尊重する観点から、居所を移動せず

に、土地所有を正規化する、つまり所有権があやふやな状況に対して、ここはあなたの土地ですと明確化することによって、そこに住んでいる人の自力改善を促すという方策が出てきました。これを市場主導型と呼んでいます。でも、そもそも慣習的に権利関係が非常に複雑化しているインフォーマル地区において、土地をフォーマル化するプロセスは困難を極めました。これはまさに、ジャカルタのチキニで目の当たりにしてきたのですが、土地所有権を付与することによって、土地が不動産化、商品化された結果、その土地を売って、どこかまた別のカンポンに住まいを求めに行くというたちごっこが起り、根本的な解決には至らないというケースもあります。

居所の安定性という観点では、土地をフォーマライズすることが必ずしも解決策になっていないという実態、あるいは土地が商品化されることによって、コミュニティが破壊され、住み続けることに対するリスクが増大する、そういった危険性も指摘されています。実際にこのバリオカンテラ地区では、所有権の法的な保障によるフォーマル化が、実質的に居所を保有し、改善できることの保障に必ずしもつながらないのではないか、という問題意識を行政側も抱えていました。

[図50]



土地保有のフォーマリティと

リスク低減手段のフォーマリティの関係

これは、Schusterの「ツールアプローチ」を参考に、土地保有の状況とリスク低減の環境改善手段を対応させた表です[図51]。右軸は、土地保有の状況がフォーマルかインフォーマルか、つまり土地所有権が明確かどうかを示しています。それに対して、居所のリスク低減の環境改善手段を、行政主導で提案していく際に、土地保有がフォーマルなところではしっかりとした手当てができるのに対し、土地保有がインフォーマルなところでは、リスク低減も自分たちでやってくださいという状況になりがちです。左上から右下にリスク低減の手当ての位置がスライドしていくという点が、非常に難しいです。われわれもジャカルタで、土地保有がインフォーマルな状況で、本当は行政と連携したかったのですが、ここが非常に難しいと言われてしまったのは先述した通りです。

アルゼンチンではせつかく住宅局と連携できるので、住民が居住環境を責任を持って管理する限り、土地保有はインフォーマルなま

ま、行政がある程度、介入しながら、環境改善に関与していくという事はできないかという枠組みを検討しました。



[図51]

バリオカンテラにおけるリスクと

フォーマル/インフォーマル改善手段の組み合わせ

このバリオカンテラという場所にある居住のリスク、例えば自然災害リスクは地滑りや洪水、あるいは日常的なアクセスなど、いろいろなリスクそれぞれに対して適切な方策として、フォーマルとインフォーマルの手段の組み合わせを検討していきました[図52]。例えば、地滑りなどの自然災害リスクに対して、通常はしっかりしたRC（鉄筋コンクリート）の擁壁をつくっていくのが公共的なやり方ですが、それに対するインフォーマルな手段として、セルフビルドの擁壁をどうつくっていくかといったことを、それぞれのリスクに対して、フォーマルなやり方とインフォーマルなやり方を考えていきました。これは、フォーマルとインフォーマルを区別することが目的ではなく、環境改善に取り組むときに、フォーマルとインフォーマルの手段の連続性の中から、適切な組み合わせを探る作業といえます。

リスク	低減に向けた手段	
	フォーマル	インフォーマル
自然災害リスク	RC 擁壁	セルフビルド擁壁
地すべり	管理システム 遊歩道 緊急時対応計画	遊歩道 マッピングワークショップ
洪水	排水路ネットワーク	セルフビルド排水
日常的リスク	手摺・階段整備 舗装整備 街灯整備	セルフビルド手摺・階段 セルフビルド舗装 セルフビルド擁壁兼手摺 街灯柱へ機能追加
アクセス	エレベーター、橋	
土地保有	土地所有権 土地利用計画	集団的所有権 参加型土地利用計画
居住リスク	強制退去/再定住	個別の住居改善
脆弱な家屋	ハイブリッドライフ (リスクに応じた生活圏の拡大)	ハイブリッド-B
安全性	法律	地域ルール
暴力・破壊行為	監視カメラ	メンテナンス・修繕管理 セルフ監視
健康・衛生	ゴミ収集システム IDシステム	コンポスト化・再利用 個別管理

[図52]

フォーマルとインフォーマルを組み合わせた実践

例えば、ボトムアップ型の一つの実践として、急斜面のところに、住民たちと一緒にセルフビルドで擁壁をつくり、斜面を手当てすることをを行いました。親杭横矢板は、建築を建てる際、基礎を掘ったときに周辺の土地の土圧を止めるためにつくるものですが、この親杭横矢板による土留め擁壁を、ここに住んでいる人たちと一緒に作り

した[図53]。このときに、矢板やH形鋼などの材料は、行政のほうで買って住民に支給し、つくる過程は住民たちでやる、そういうフォーマルとインフォーマルの組み合わせで行いました。

はじめにコンクリートを流し込む穴を掘って、コンクリートを詰めて、そこにH形鋼を立てていくという、非常に原始的な工法ですが[図54]、構造家の佐藤淳さんと研究室の学生が現地で基礎や材料を検討してくれました。RCの擁壁ほどの強度はないですが、地滑りが起きたときに、死なずに逃げられるぐらいの時間稼ぎというか、避難路を担保してくれる程度のものでできれば、造成まで頼らなくても、自分たちの力で地域を少しずつ良くしていけるのではないかとということで、こういったものをつくりました。私たちが帰った後、子どもたちがこんな絵を描いてくれました[図55]。こういうものを、地域の中で危険そうなところに4カ所、施工しました[図56]。



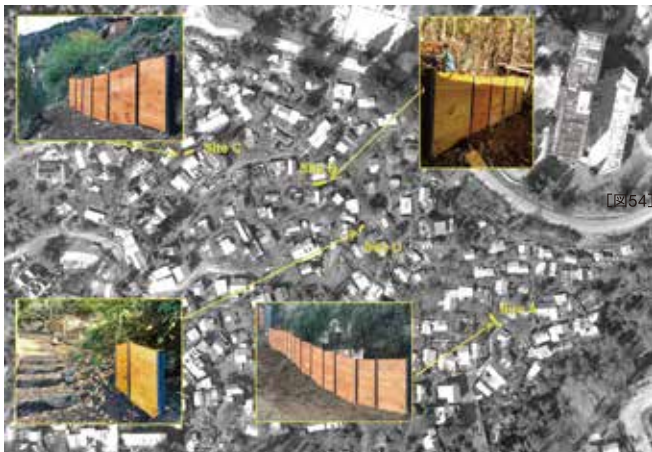
【図53】



【図54】



【図55】



【図56】

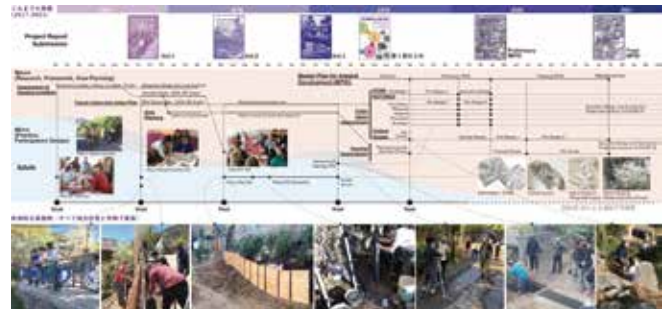
人間と土地の持続的な関係を支える

パブリックスペースと居住の提案

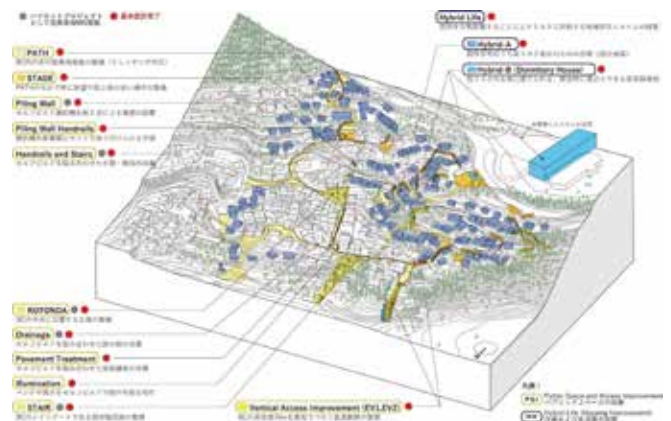
このようなノリを展開して、地区の全体計画をつくりました[図57]。自然環境の改変を最小化して、人間と土地の持続的な関係を支えるパブリックスペースと居住の仕組みを提案しています。先ほどの擁壁のようなものをつくり、雨水の流れが危ないところに側

溝をつくり、いろいろなことを少しずつやって、その成功体験を地域の人と少しずつ共有していきました。

先ほどのジャカルタの事例は住居の提案だったのですが、アルゼンチンでは行政と協力したこともあり、どちらかというとパブリックスペースの提案が多かったです。青色の部分が住居で、黄色い部分がパブリックスペースです[図58]。パブリックスペースの中でも、例えば手すりをつくる際、インフォーマルの力を使った手すりはどういうものがあるとか、街灯はどういうものがあるとか、床の仕上げをどうしようとか、そういうことを細かく手当てしていきました。青色の部分についても、住居に対してはどうしていくかということ細かく提案していきました。



【図57】



【図58】

斜面住宅地をつなぐ柔らかいインフラ

先ほどの擁壁もパブリックスペースの改善策の一つですが、より大規模なものとして、市が主体となり、エレベーターを備えた垂直動線インフラを整備するというプロジェクトがありました。この地域では、非常に高低差があるところでのアクセスのリスクが大きな問題だったので、この地域のアクセスを改善するという目的の提案です。中心市街地とこのバリオカンテラという斜面地が違うまちであり、ある種ネグレクトされている状況がありましたが、そこにシンボリックなアクセスの動線をつくることで、バリオカンテラもまちの一部であるということを主張しつつ、ここを訪れる観光客やトレッキング客のルートとして使えるようなものを提案しました。

70メートルの高低差を最短で効率的につなぐよう、エレベーター

構築物を2カ所に計画しました。これはバリオカンテラ内の居住者の日常的な生活動線や避難路を改善するとともに、旅行者が中心市街地だけでなく、バリオカンテラのエリアも訪れ、それによって、この辺りにもショッピングができるなど、商業的なチャンスを生んでいくことが期待できるようになります。

これが下のエレベーター(EV1)のイメージです[図59]。コロンビアのメデジンにあるメトロケーブルが有名だと思いますが、あれもアクセスを改善すると同時に、シンボリックに斜面地と下のまちをつなぐことに大きな意義があると思います。それと同じような効果を、このEV1でもシンボリックな建築で主張しています。これが上のエレベーター(EV2)のイメージです[図60]。これはSDレビューで入選した際につくった模型です[図61]。これも構造設計は佐藤淳さんに担当していただきました。

本来であれば、この案を持って、もう一回現地に行き、現地の工法でこれをディベロップしようというときに、ちょうどコロナ禍になってしまい、あとアルゼンチンの経済破綻も重なり、ストップしてしまいました。

クローズアップして見ると、大阪・関西万博の大屋根リングのように、貫を使った木造で、地元の労働力をうまく使いながら、つくりやすい構造を提案しています[図62]。少し日本的な要素もあるので、アルゼンチンの工法と組み合わせるとどうなるのかという部分を検討しているところで止まってしまいました。全体はシンボリックで、ある程度大きいものですが、つくり手としては、ここに住んでいる人たちの手もかなり借りながらつくっていかうと計画していました。



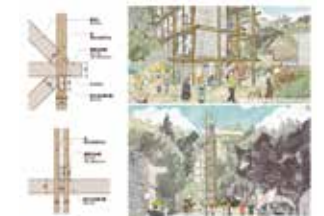
【図59】



【図60】



【図61】 ©SADAO HOTTA



【図62】

Hybrid Life: 居住システムの提案

一方で、先ほど青色で示した既存の住宅についても、斜面地に展開する多重のリスクに対して、柔軟な住まい方によってエリア全体でリスクに対処するという提案をしています。

一般的な斜面地のリスク対応として、居住地をつくる際は、まず斜面地にしっかりしたRC擁壁をつくり、ひな壇造成して、斜面のリスク

を解消した上で、フラットな土地に切り分け、そこに住宅を建てていくという方法があります[図63]。そうすれば、この家を買った人は、自分の宅地内のみ責任を持てば良いというのが、斜面地の住宅開発の一般的なやり方だと思います。

それに対して、バリオカンテラには、既に住宅がたくさん建っており、それらを全てクリアランスしてひな壇造成するという方法はなかなか難しい状況の中、今の場所に住まいながら、いかに斜面のリスクを低減していけるかということで、「Hybrid Life: 居住システムの提案」をしました[図64]。これは、居住者の生活圏を拡大することによって、リスクに対応していくという仕組みです。今、住んでいる住宅は、もし何か地滑りなどが起きたときに死なないように、改修や減築を行いながら住まいを最低限手当てしていく。それと同時に、さらにリスクが高まったときには、安全なシェルターに逃げ込むことができる。自分の居場所を、リスクが非常に軽減されたシェルターと、今、住んでいる住宅の2カ所、持つことができるような枠組みを提案しました。そうすることによって、自分の敷地の中に閉じこめるのではなく、地域全体で生活するという住まい方ができて、それが地域に対する愛着にもつながっていくと考えたのが、この「Hybrid Life」です。

例えば、豪雨により地滑りが起こる確率が高まっているときは、みんなで近くのシェルターに逃げ込むことができます。最近の例では、まさにコロナ禍で皆さんも経験したように、パンデミックの際、隔離された場所に移ったことがある人もいかもしれませんが、そういう状況のときにもシェルターを使うことができます。このように居場所を分けて、地域の生活圏を拡大していくことによって、リスクに対応するというイメージです。最初に提案したとき、地域の人たちはピンときていないというか、「何ですか、それは」といった感じだったのですが、パンデミックを経験して、「ああ、やっと分かりました、そういうことですね」と納得してくれました。だから、もう一回アルゼンチンに戻って、これを実現させたいと思っています。

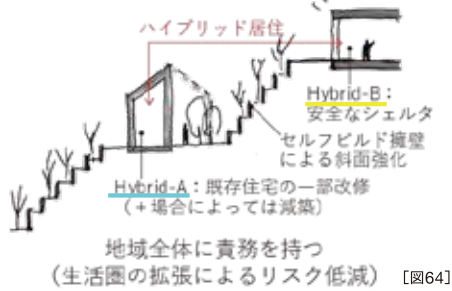
実は、先ほどお見せした模型写真のエレベーターの下のほうに、シェルターとしての住宅が合築されています。あと、上の平地のところにも、シェルターの住宅があります[図65]。限られた範囲の住居を高性能化するのではなく、地域全体でリスクを共有することによって、土地と人間が持続的に関わっていく契機をつくるのが、こういう場所では可能性があるのではないかと考えています。

×一般的なリスク対応

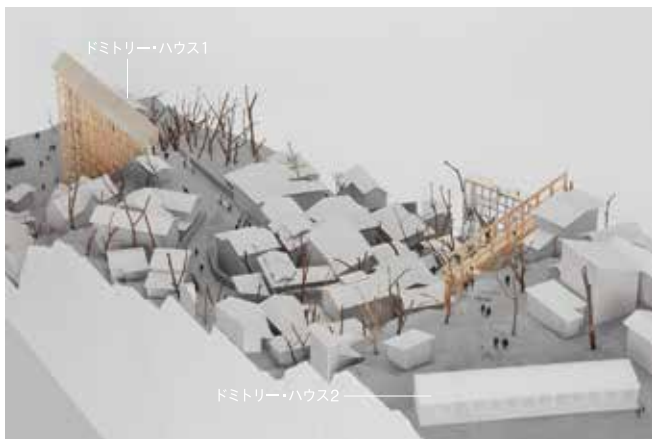


【図63】

○ハイブリッド居住システム



【図64】



【図65】 ©SADAO HOTTA

ボトムアップ型: ダイナミクスとしてのフォーマル/インフォーマル

また先ほどのインフォーマル/インフォーマリティの話に戻ります。後で紹介しますとお話したボトムアップ型について、これから触れていきます。これまでご説明した、フォーマルがつくられることによってインフォーマルが規定されるトップダウン型に対して、ボトムアップ型はダイナミクスとしてのフォーマル/インフォーマルです。これは、フォーマル/インフォーマルの線引きを第三者に決められるのではなく、そこに生きる当事者間の切実な交渉や実践によって、動的に動くものと見る視点です。フォーマルが価値の固定化の働きであるのに対して、「インフォーマルは『価値の絶え間ない交渉可能性』の働きである」とA.Royさんも提唱しています。

具体的な事例で示すと、これは先ほどのジャカルタの住民による建設中の写真ですが[図66]、ここでの建設プロセスは、日本の建築現場とはだいぶ違って、明文化された建築物の法的な基準も、

多分どこかにあるのですが、誰もそれを見ていないし、構造計算や防耐火の仕様も全く要請されません。確認申請もなく、町内会の偉い人に図面を見せてOKをもらえれば良い程度です。ですから、ここでは柱の寸法や、路地への2階床の張り出し寸法、隣の家との壁の接し方など、そういったことの全てが、打ち合わせや近隣との粘り強い交渉で決まっています。つまり、フォーマルな法律で建築の外形が決まるのではなく、交渉によって、建築のかたちがじわじわと決まっていくという感じがあり、実はこの建物の2階も、敷地境界線からがっつりはみ出してつくられました。

もちろん、ルールが全くないわけではなく、こういった個別の交渉の履歴が積み重なった結果として、明文化されていないけれど、地域で共有されているルールみたいなもの、慣習的な規範みたいなものは、当然あります。これは当事者たちの内側から、インフォーマルだったものが徐々にフォーマライズされていく、ルール化されていくものと捉えることができます。つまり、こういう場所で、交渉によってインフォーマルに決めたことであっても、次の日にはそれが参照の対象になるので、徐々にフォーマルなものになっていくという関係性があります。これには良い面も悪い面もありますが、ある程度、インフォーマルなところで交渉によってつくられていて、それがやがてフォーマルになっていくほうが、どこかの第三者につくられるフォーマルな枠組みよりも、地域の実情により合ったものになる可能性があります。

原広司さんは、著書『集落の教え100』[図67]の中で、こういったインフォーマルとフォーマルの内発的な運動が、共同幻想や意図された制度として、集落の姿に転写されることを指摘しています。この本の「オアシス」という章で、「無意識に制度や慣習を踏襲するのではなく、あらゆる場合にそれらを検討せよ」と、くぎを刺しているわけです。内発的な慣習が空間に転写されるのですが、それをただ受け入れるのではなく、常に疑い続けなければならないと言われていきます。ボトムアップでつくられたフォーマル/インフォーマルが、いつの間にかトップダウンのフォーマルへと形骸化される恐れについては、常に意識的であればならないということを指摘されていて、これは本当に肝に銘じておこうと思っているところです。



【図66】



【図67】

ボトムアップ型のインフォーマルな領域を耕す実践

では、ボトムアップ型でどのような事例があるかという、例えばドットアーキテクツの「Umaki Camp」[図68]では、建築家が計画や設計するところにとどまらず、その役割を拡張して、設計すること、つくること、使うこと、全てに関与するという活動をしていて、非常に魅力的だと思います。こういう専門性とアマチュアリズムが渾然一体となった建築のつくり方の他に、岡部先生が千葉県館山市で「ゴンジロウ」という茅葺き屋根の古民家を拠点にプロジェクトをやっているのですが[図69]、朽ちかけた古民家の管理をただで引き受けて、学生を含めた実践の場としていくような活動もあります。何をつくってもいい、つくらなくてもいい、誰かにつくれと言われてつくるのではなく、自分たちで考えて、何かをやっていくということが、インフォーマルな領域を耕す実践の良い事例だと思います。



【図68】



【図69】

ラーバンデザインオフィスでの実践

こういうインフォーマルな領域を耕す実践をされている方は、日本中にたくさんいらっしゃると思います。そういうことが、今まではどこで何をやっているのか、あまり分からなかったのですが、最近はインターネットでいろいろな活動が見られるようになってきて、こういう流れが一つの運動として盛り上がっていくのは、非常に良いのではないかと考えています。

私自身も、今は具体的なフィールドはないですが、自分の生活を自分でつくるような実践に関わりたいたいと思いつつ生きているという感じです。先ほどのようなハードコアな事例と比べるとささやかですが、私の設計事務所での小さな実践を紹介します。自邸や自分の空間だと、いろいろ自分でやりたいようにできる、インフォーマルなところがあと思っています。

これが事務所の外観です[図70]。道路側から建具を少しセットバックしたようなつくりになっています。これが入居する前の既存の外観です[図71]。元々は、道に面する部分にガラスのサッシがあったのですが、道から入り口を少しセットバックすることによって、何か境界が曖昧になるというか、空間が生まれるわけです。オーナーが所有している場所を、ラーバンデザインオフィスが賃貸で借りて、境界線の一步向こうは国道が通っていて、国が管理する街路樹もあるのですが、そこに私たちが植栽を勝手に置いて、境界を曖昧にしていくな感じですよ[図72]。

これは非常にささいなことですが、自分のつくりたい空間や地域とのつながりを、自分のスペースでつくっていくような試みを少しずつやっていくと、この程度のささいなことでも、結構、日常が楽しくなるし、意味のあることなのではないかなと思います。時々、こういうマルシェを開いて、パンや古本、雑貨を売っています[図73]。



【図70】



【図71】



【図72】



【図73】

中野総合学科新校(仮称)の設計

これが最後に紹介するプロジェクトです。今、長野県中野市で、高校の建て替えの設計をやっています[図74]。NSDプロジェクト(長野県スクールデザインプロジェクト)の一つで、曾我部先生もみかんぐみで伊那新校(仮称)を設計されていると思います。私たちが設計している中野総合学科新校(仮称)は、今、基本計画が終わり、これから基本設計に入る段階ですが、完成は5年以上も先なので、これからしばらく付き合っていく仕事です。

中野立志館高校と中野西高校という2つの高校がこの地域にあり、中野西高校が南のほうにあるのですが、そちらの校舎を閉じ、2校が統合して、立志館高校の敷地に新校ができます。西校の良さと立志館高校の良さを統合した、新しい総合学科高校をつくるという計画です。

敷地はこの写真の下のほうにあります[図75]。これがクローズアップした写真で、立志館高校が既に統廃合を繰り返しているため、いろいろな時期の校舎が敷地いっぱい建っているような状況です

【図76】。この中で、周辺の比較的新しい建物は残して、真ん中の築年数の古い建物を解体して、新しい校舎をつくる計画です【図77】。

この計画そのものについては、今日はあまり紹介しませんが、この中の私たちのコンセプトというか、計画の肝の一つとして、前面の道路に開かれた広場をつくりたいと考えています【図78】。大学生の皆さんは、つい最近まで高校に行っていたと思うのですが、高校は小学校や中学校よりも地域に対して閉ざされているというか、卒業すると、その高校に戻ることはほとんどないような場所であることが多いです。この中野立志館高校は、たまたま向かいに、大きなホールを持つ市民会館「ソソラホール」があり、その南には市役所があり、割とパブリックスペースの中心地にあるので、そこに周囲に閉ざされた高校ができるというのは、非常にもったいないと考えました。人口も減り、寂れかけているまちの中で、まちの人たちが自由に使えるようなパブリックスペースを高校の敷地内に埋め込むことができれば良いのではないかと考えています。

この図に「なかのカフェ」と書いてありますが、道に対して開かれたカフェのような空間があったり、ファブラボがあったり、そういう場所をつくりたいと提案しました【図79】。これはなかなかハードルが高いのですが、できれば地域の人が入ってこられるような一画をつくりたいと思っています。これは基本計画のときのパースなので、非常にラフなものですが、カフェはこのような感じで、向かいの道路に対して開放的な空間となっています【図80】。

所有権に関して言うと、県が所有する土地を地域に開くことが、打ち合わせて話をすると、やはり、かなり難しいことが分かってきました。別に広場をつくるのはいいけれど、セキュリティの問題はどうするのかという話もあります。ただ、先ほどもボトムアップの交渉とか、粘り強いインフォーマルな検討の話をしました。敷地内にフォーマル側の論理だけでパブリックスペースをつくっても、なかなかうまくいかないのではないかと、今、悩みながら設計しているところです。



【図75】



【図76】



【図77】



【図78】



【図79】



【図80】



【図74】

設計分室での「なかのカフェ」の実験

そのチャレンジの一環として、敷地から歩いて5分ぐらいのところ
に、設計分室を設けました[図81]。築85年以上の木造の空き家があ
り、すごくラッキーなことに、ここを地元の呉服屋さんがただで使っ
ていいよと言って貸してくれました[図82]。今、この場所を設計分室
として、少し開かれた雰囲気にして使っています[図83]。ここをただ
で借りられたことが、非常に大きいことだと思っていて、もし私たち
が賃料を払って借りた場所だと、どうしても私たちがちゃんと管理し
て、誰か他人が入ってくる時には、私たちが借りている場所に入っ
てもいいか駄目かというジャッジをすることになりますが、ただで借
りている以上、人が入ってきてても文句を言えないような、何かそうい
う雰囲気があります。まちの北の方に、所有者である呉服屋さんが
いるのですが、その人は地域の至るところに土地を持っていて、あま
りここに頓着していない人です。そこをただで借りているということ
で、誰のものでもない、なおかつ誰でも使って良いような雰囲気がで
きているのかなと思います。

ここで「なかのカフェ」の実験というか、地域にとってどういう場所
があるといいのかなということを見ていっています[図84]。ここでで
きるだけ育てていって、高校の中にも、こういう開かれた場所があるこ
との良さにつなげていきたいと考えています。こういう活動も、ただ単
純にフォーマルの内側にとどまっていたのではできないかもしれないです
が、すごく小さな規模であっても、少しでもその境界をまたぐような実
践と組み合わせさせてやっていくといいのかなと思っています。

インフォーマルな領域を保持する／耕す実践

最後にまとめると、トップダウン型のインフォーマルという視点
で言うと、いろいろな人々の生きる力やそういったものをスポイル
しないような建築をいかにつくれるかということが主眼にあります。
これが「インフォーマルな領域を保持する実践」だとすると、一
方で、ボトムアップ型として、そもそも自分がそこに飛び込んでいっ
て、インフォーマルな領域を耕していくという実践にも、すごく魅力
を感じています。これはどちらが優れているということではなく、
実は地続きでつながっていたりするので、ここの往復運動という
か、これらの両方を見据えながら、いろいろなことに取り組んでい
きたいと思っています。



[図81]



[図82]



[図83]



[図84]

DISCUSSION

柏原沙織(神奈川大学建築学部特別助教)

曾我部昌史(神奈川大学建築学部教授)

立花美緒(神奈川大学建築学部准教授)

藤原ちから(orangcosong・神奈川大学非常勤講師)

山家京子(神奈川大学建築学部教授)

柏原 雨宮先生、どうもありがとうございました。今日はオンラインでも52名の方が聞かれていて、学生さんもかなり多く参加していたと思っています。

多岐にわたるお話をさせていただきましたが、インフォーマル／フォーマルという視点から、どのように建築やまちを捉えられるかということが、非常に示唆に富んで、面白かったと思います。特に日本は、かなりフォーマルが強い国だと思いますが、私自身が今まで暮らしてきたところと比べると、インフォーマルな地域は枠外という印象があり、少し怖いようなイメージを持っていました。そんな中で、昨年度、雨宮先生と一緒に参加する共同研究で、カンボンチキニをご案内いただきました。実際に行ってみると、雨宮先生と一緒に行ったからというのも大きいですが、それほど恐れることもないというか、地域の皆さんがただ普通に暮らしている印象で、ちょっと拍子抜けしたというか、インフォーマル／フォーマルはかけ離れたものではないと感じました。そういったいろいろな政治システムやルールの中での生活の実態や空間の表れを知るのも、非常に興味深く、大事なことだと思いました。

では、ここから質疑応答に入りたいと思います。ご質問のある方はいらっしゃいますか。

山家 雨宮先生、どうもありがとうございました。ジャカルタのカンボンチキニ、アルゼンチンのバリオカンテラでの具体的な実践のお話から、フォーマル／インフォーマルのご説明もあり、それをご自身の日本での建築デザインとどのようにつなげていくかというお話もありました。非常に盛りだくさんで、密度の濃いお話をしていただき、もっとたくさんの人に聞いてもらいたかったという気がしています。

今日、2つのインフォーマルな居住地について、いずれも建築的にどう介入するか、例えばカンボンチキニであれば、劣悪な都市環境、高密度居住があって、それに対してどのように住宅に光を挿入していくかというお話がありました。バリオカンテラでは、斜面地で災害に対して脆弱なところがあり、それに対してエレベーターや擁壁というかなり具体的ご提案があって、非常に面白いなと思いました。

本日はアジア研究センターのレクチャーということもあり、研究テーマである「都市の生活圏」という観点から質問したいと思いま

す。生活圏という観点から見たときに、すぐ基本的な質問で恐縮ですが、そこに住んでいる人たちはどこで働いているのか、なりわいとしてはどうなっているのかという点と、あとはコミュニティについて、補足して教えていただければと思います。

雨宮 ありがとうございます。例えば、ジャカルタのカンボンで言うと、カンボンにもいろいろなタイプがあり、僕たちが対象としていたアーバンカンボン、都市カンボンと言われているものは、中心市街地の中に埋め込まれているタイプでした。あとは、少し郊外にあるカンボンは、グリッド状で割と計画的につくられているところもあり、結構さまざまで、場所によって、なりわいも恐らく異なると思います。

僕たちが対象にしていた都市カンボンの居住者は、職業はかなりまちまちだと思います。カンボン内でお総菜をつくり、食事をするお店をやっている人もいますし、先ほど商店街の写真をお見せしましたが、そこで物を売っている人もいます。まちから出て、ケンタッキーで働いたり、バイクタクシーをやっていたりする人もいます。都市にあるということもあって、カンボンの中だけで生活が完結しているということではなく、割と流動性が高い場所と捉えていただいても良いと思います。

あとは、ずっと住んでいる人だけではなく、いわゆる貸し部屋ののようなレンタルスペースもかなりたくさんあり、そういうところに一時的に住む工事現場の人や、地域の病院に勤めている人たちも相当住んでいます。私たちも、もう十数年、関わっていますが、私たちが一番長期間いるかもしれません。かなり入れ替わりがあるので、あのときにいた人はもういないね、あのときにリーダーだった人ももういないね、ということもよくあります。意外と田舎から出てきている人も多いですし、他に良い場所が見つかったら、あっさりなくなる印象があります。なので、なりわいとしては、いろいろあるという感じかなと思っています。

アルゼンチンのほうは、いわゆるリゾートタウンなので、中心市街地のホテルなどで働いている人も結構多いと聞いています。インフォーマル居住地の中で働くことに、あまりこだわっている感じでもない、というのが私の印象です。

山家 ありがとうございます。レクチャーが始まる前に少しお話ししましたが、私たちは今、山本理顕さんが構想する「地域社会圏」プロジェクトに関わっています。既存の住宅地の中に新たな住宅空間をどう挿入していくかというモデルを検討しているのですが、それが今回のインフォーマル／フォーマルの話ともつながっているところがあるように思いました。そのあたりは、立花先生や曾我部先生からもご質問があるのかなと思っています。

立花 神奈川大学の立花です。どうぞよろしくお願ひします。

実はこの前、曾我部先生とご一緒に、ベネズエラのバリオ(地区)に行ってきたのですが、アルゼンチンでは、住民の自治組織はそれほど強くないのでしょうか。それとも、自治組織みたいなものはあるけれど、それとは関係なく、土地を売っていなくなってしまうという状況があるのでしょうか。

雨宮 アルゼンチンのほうは、それぞれの敷地もそれなりに大きくて、そこまで流動性は高くないと思います。地域の住民組織も、割としっかりしていると思います。

立花 住民の組織はしっかりしているけれども、土地の所有権を与えると売っていなくなってしまうのでしょうか。ベネズエラも、元々不法占拠だった土地の所有権を与えたときがあるようで、実態としては、もしかしたら同じようなことが起きていたのかもしれないですが、住民が地域に愛着を持っていて、自分たちで次はどうしていいかということプロジェクト化して、政府に提案するというプロセスがあるようなので、同じ南米でも違いがあるように思いました。

雨宮 僕たちが実体験として流動的だと感じたのは、ジャカルタのほうなので、南米では、土地所有権のフォーマル化は結構、進んでいるものの、結果的にそれがうまくいって良かった事例もあれば、失敗して良くなかった事例もあるので、どちらが良いという話でもないのかなと思います。その原因までは分からないですが、必ずしもうまくいくわけではないという実感はあります。だから、場所によっては、そこに土地の所有権を与えてフォーマライズすることによって、自分たちの土地を自分たちでちゃんと良くしていいかというモチベーションにつながる可能性は、もちろんあると思っています。

立花 流動的なのは、アジアの話なのですね。アジアと南米では、やはりだいぶ違いそうです。

雨宮 そうですね。敷地自体が非常に細かくて売りやすいので、流動性が高いということもあるのかもしれません。

曾我部 山家先生から雨宮先生に、事前に地域社会圏の活動について、お話しされたのでしょうか。

山家 いえ。レクチャー前にほんの数分、立ち話でお話しました。

曾我部 なるほど。少し唐突な印象を持たれたのではないかなと思ったので、少し補足をさせて下さい。神奈川大学から山本理顕さん

の設計事務所が近いということもあって、山本理顕さんが提唱されている地域社会圏の考え方を、大学がある六角橋周辺の住宅地で展開してはどうかという研究グループがあり、立花先生はその代表を務められています。その延長線で、今、山本理顕さんがさまざまなインフォーマルなエリアに関心を持っている中で、ベネズエラの政府と関係が深くなったということもあり、カラカスのバリオの視察に行ってきました。

先ほど、山家先生がなりわいの話をされていました。山本さんの考え方の中に、住んでいる人たちが自分たちで商売をやる「見世」と呼ばれる場所があります。地域社会と個人の暮らしの接点となるような場所です。雨宮さんのお話でも登場したそうした場のあり方が、われわれの関心ともつながったのかなという気がしていました。

今日の雨宮先生のお話は、話の幅がとても広く、多様だったのですが、一方で、インフォーマルやインフォーマリティに対する雨宮先生ご自身の考え方や思いが、割と明確に、どのお話にも共通してありました。それには共感もしたし、すごく良いなと思ったのですが、何よりもすごいなと思ったのは、インフォーマルな居住地域の話、あるいはそれに対する分析的な視点の話で今日のレクチャーは終わるのかなと思っていたら、自らの設計事務所で行う活動や、設計提案そのものにも、その関心を応用していいかとされている。事務所のことはともかく、設定提案の中に組み込んでいくのは、ものすごくエネルギーがいることだし、多くの場合、嫌がられるような場面も少なくないと思います。それぞれのインフォーマルなエリアで行われた事柄一つ一つにも、いろいろと聞きたいことはあるのですが、最後に紹介して下さった中野新校にけるエネルギーが感じられるような、分かりやすく言うと苦労話のようなことがあれば、共有していただけるとうれしいなと思いました。

雨宮 まだ基本計画が終わった段階なので、恐らく苦労はこれから来るのかなと思いつつも、これまで10年間、インフォーマルな場所でプロジェクトをやってきたので、考え方も割とラフになってきているところもあります。だから、あまり苦労してやっているという感じではなく、どちらかというと楽しんでやっています。NSDの中でも、いろいろな企画があると思いますが、その中で、主体的にこういうことをやりたいというものを埋め込んでいけたほうが、自分が楽しんでやれるし、せっかくだから現地にアパートも借りているのですが、そこに住み込んで、地域の人と一緒に何かをやっていくことが楽しいと思ってやっているの、そこはあまり苦労とは感じてなくて、ジャカルタから連続して地域に入り込んで、楽しんでやっているという感じなんです。どちらかというと、今後、なかなか越えられない壁がありそうなので、そこをどう乗り越えるかというのは苦労しそうだと思っています。

曾我部 楽しんでやっているということですね。

藤原 今日は興味深いお話をありがとうございます。いろいろとお聞きしたいことがあるのですが、今のお話の流れで言うと、中野新校のプロジェクトで、セキュリティーの問題について言及されていたと思います。やはり学校という性質上、外に開くことに対して、公共セクターである県からの反対がありそうだとか、保護者の声があるとか、日本においてインフォーマルなものを妨げる理屈としては、安全面の問題が強いと思うのですね。例えば、僕たちがアートプロジェクトをやるときに、行政の依頼でやる場合もありますが、やはり安全性など、フォーマルな論理が結構のしかかってくると感じています。分室を設置したのは、ちょっとトリッキーな抜け道なのかなとお見受けしたのですが、実際にやりながら、どういう手応えがあるのか、あるいは壁みたいなものを感じていらっしゃるのか、そのあたりをもう少しお聞きできればと思いました。

雨宮 そうですね。分室をオープンして1年弱になりますが、オープンしたときは、ふらっと人が入ってきてくれるとうれしいなと思って始めたものの、やはり地方都市ですので、基本的に誰一人歩いていないようなまちで、その期待はちょっと外れたという感じはあります。でも、Instagramで頑張って発信したり、チラシやニュースレターを配ったり、いろいろやっていく中で、徐々に認知度が上がり、わざわざ来てくれるような人も増えました。このプロジェクトは県主体ですが、中野市長も気に入ってくれて、市長が結構訪れるなど、人が集まる場所になりつつあるという感覚はあります。

ただ、やはり県の仕事なので、最終的には、本当にインフォーマルな場所がつかれるわけではないと思っているのですが、できる限り、そちらの方向に近づきたいという気持ちを押し出すことによって、少しでもそういう雰囲気のある場所がつかれるような落としどころにしたいです。

やはり先生、個人個人と話していると、本当はそういう場所がやりたいという人がたくさんいます。一方で、県や教育委員会といったフォーマルな主体が別にあるので、個人としては、皆さんそれぞれにこういう場所があるといいとか、そういう思いのある方はたくさんいらっしゃるのですが、県の教員は3年間で異動してしまいますし、団体の思いとして、なかなかつなげづらいという難しさはあるかと思えます。

藤原 異動してしまうというのも、先ほどのカンポンチキニの人が入れ替わってしまう話と共通していますが、やはりプロジェクトをやっていく上では、地元の協力者が必要になりますよね。特に、海外の場合は言語とか、いろいろな問題が発生するときに、地元の協力者が

重要になりますし、日本のどこかの地域でやる場合も同様かもしれませんが、相手の協力者との関係の築き方や、協力者が入れ替わってしまうという問題については、いかがでしょうか。

雨宮 ジャカルタのプロジェクトは、運良く、インドネシア大学とずっと一緒にやっていて、そこのエリサ先生という方が、この地域ですとやってくださっていて、そこの学生も毎年一緒に参加しているので、そのおかげでやっている感じです。ただ、先ほども申し上げたように、居住者は入れ替わっていくので、その都度、新しいリーダーとお話して、関係性をつくって、というふうにやっていっています。

柏原 ありがとうございます。それでは、本日の講演会は、これで締めさせていただければと思います。改めまして、雨宮先生、どうもありがとうございました。

雨宮 ありがとうございます。